《ボク》キャラと《オレ》キャラの接点
—ことばとキャラクタの結びつきに注目して—
Connection between <<*boku*>> character and <<*ore*>> character
- How words are connected with “character”-

西澤　萌希
NISHIZAWA, Moeki

摘要

In Japanese, how the people utter with a first-person pronoun not other pronouns? I hypothesize that Japanese first-person pronouns are connected with “characters”, and Japanese people make use of these connections. Then how Japanese first-person pronouns are connected with characters? In this article, I analyze the connection of Japanese first-person pronouns “*boku*”, “*ore*” and characters.

Sadanobu mentioned that many words are connected with “characters” in Japanese, and Japanese people can show their characters with utterances. Sadanobu named the characters showed with utterances including the “role language”, that was put forward by Kinsui, “verbal characters”. And he suggested that we can analyze verbal characters using four perspectives, “class”, “status”, “gender” and “age”. The four perspectives enable the analysis of the systematic verbal characters, so in this article, I use the perspectives.

In the conventional study, Japanese first-person pronouns have been analyzed from various points of view, for example, contrastive linguistics, historical linguistics, the role language, sociolinguistics and so on. Those most pointed out that “*boku*” had images to be kind, educated, weak or childish, and “*ore*” had images to be arrogant, strong or wild. These analyses clarified a very important point that “*boku*” or “*ore*” is connected with some images, but in these analyses, “*boku*” or “*ore*” was observed at various points of view, so it is difficult to understand the images of Japanese first-person pronouns systematically. Based on it, I try to analysis “*boku*” and “*ore*” systematically with Sadanobu’s four perspectives.

In this article, I observe Japanese first-person pronouns “*boku*” and “*ore*” in the lyrics of the Japanese popular songs and the lines of Japanese comics, and I clarify the following three points.

1. “*Boku*” can appear as a vulgar and masculine character, and “*ore*” also appear as a similar character.
2. Even if “*boku*” and “*ore*” can appear as a similar character, “*ore*” tends to appear as a character who does the utterance more vulgar than “*boku*”.

3. Even if “*boku*” and “*ore*” can appear as a similar character, “*boku*” tends to appear as the character temporarily, but “*ore*” tends to appear as the character constantly.

Based on the above, I conclude that “*boku*” as a vulgar and masculine character is the character who is going to appear like “*ore*”.

キーワード：*発話キャラクタ　役割語　自称詞　《ボク》キャラ　《オレ》キャラ*

Keywords: verbal characters, role language, first-person pronoun, <<*boku*>> character, <<*ore*>> character

１．はじめに

私たちは日常の発話でどの自称詞を使うかを、あるいはそもそも自称詞を使うか省略するかを選択する。選択の基準としては様々考えられ、従来では相手との上下関係、場の公私、自称詞がもつイメージが挙げられてきた。これらの基準は、自称詞によってある人物像が表れることを想定するという点で共通する。例えば上下関係について、目上の相手には「アタシ」よりも「ワタシ」が使われるが、それは「アタシ」が粗野な人物を表すと想定されるためである。この人物像は定延（2011）の概念「キャラクタ」[1]に関わるものである。

自称詞がキャラクタ（人物像）と結びつく重要な言語要素の一つであることは、「役割語」[2]の観点から既に指摘されている（金水 2003、定延 2011 など）。「ボクがやるよ」と「オレがやるよ」では異なるキャラクタが表れ、自称詞は文末表現など他の言語要素と組み合わさりながら様々なキャラクタと結びつく。このように従来の研究では、「オレ」と「ボク」で表れるキャラクタが異なる、つまり異なる自称詞が用いられれば異なるキャラクタが表れるという前提のもとで自称詞とキャラクタの結びつきが指摘されることが多い。しかし実際は、同じ自称詞を用いていても異なるキャラクタが表れることや異なる自称詞でも同じようなキャラクタが表れることがあり、自称詞とキャラクタの結びつきの問題は単純ではない。

以上の問題意識のもと、日本語自称詞「ボク」「オレ」がどのようなキャラクタを表すのかを、「発話キャラクタ」（定延 2011）の概念を用いて 4 つの尺度「品」「格」「性」「年」で分析する。そして「ボク」と「オレ」の違いに関して従来の研究を踏まえつつ、「ボク」と「オレ」が表すキャラクタの接点を探る。その結果、「品」に関して「ボク」と「オレ」が表すキャラクタの接点が示唆された。

２．発話キャラクタ

「発話キャラクタ」とは、ある人物が発することば（役割語も含む）によって表れるキャラ

クタである。例えば、「わしはそろそろ家に帰りたいのじゃがのぅ」という発話では〈老人語〉によって《老人》キャラクタが表れる。定延（2011）によれば、「発話キャラクタ」の中でも現代日本語社会の住人である「《若者》キャラクタ」のようなものを「《私たち》タイプ」、現代日本語社会の外の住人である「《平安貴族》キャラクタ」のようなものを「《異人》タイプ」といい、両者はそのあり方が異なる。《私たち》タイプは、例えば「おれはそろそろ帰るのさ」と言えば男性的、「あたしはそろそろ帰るわ」と言えば女性的であり、その間に無数の中間的な表現が考えられるように、発動されるキャラクタ同士が連続的にひしめき合って存在する（図 1）。一方で《異人》タイプは、「《平安貴族》キャラクタ」はあっても「《鎌倉貴族》キャラクタ」はないというように、連続的な性質は持たず点在的に存在するのみである。

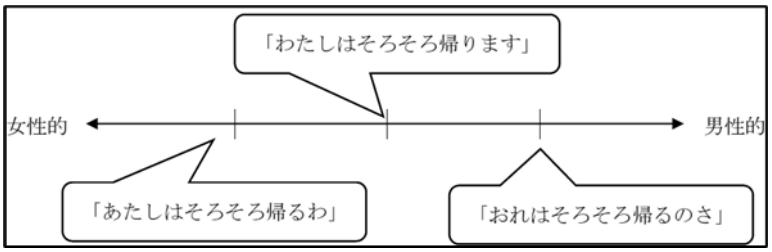

図 1　《私たち》タイプの発話キャラクタのあり方

このように《私たち》タイプの発話キャラクタは連続的な性質があるため、図 1 で性別に関してそうであったように、ある一定の尺度で分析することが可能である。そのような尺度として定延（2011）は「品」「格」「性」「年」の 4 つを挙げている。「品」は話し手を《上品》か《下品》かの 2 つに分類して判別する尺度である。同様に「格」は《別格》《格上》《格下》《ごまめ》の 4 つに、「性」は《男》《女》の 2 つに、「年」は《老人》《年輩》《若者》《幼児》の 4 つに分類される。さらに、それぞれの尺度において分類できない場合は「無指定」とすることができる。例えば(1)について、下線部を根拠に、a は「品」が《上品》、「格」が《格下》、「性」が《女》、「年」は無指定である（以下、特に表記がない作例や下線はすべて筆者による）。b は「品」が《下品》、「格」が《格上》、「性」と「年」は無指定である。c は「格」が《格下》、「年」が《老人》、「品」と「性」は無指定である。

(1) a. お父様、おなかが空きましたわ。

b. お嬢が腹が減ったと言っておる！メシを用意しろ！

c. ははあ、すぐに用意いたしますじゃ。

加えて、西澤（2019）は「格」の分類として《同等》を設けることを提案している。《同等》なキャラクタとは、同じ話者が同じ場面で同じ聞き手に対して、《格上》と取れる表現と《格下》と取れる表現を併用しているような場合に表れるキャラクタである。(2)は歌詞の一部である。

(2) a. 踏みならせ！ DAN DAN DANG！ 目の前を通り過ぎるだけの日を DAN DAN DANG！ 変えていけ 想像の「今」へ

b. 「こんな筈じゃない」 逃げた心を もう一度 あの日の 希望の色で満たしてよ

（矢野健太 starring Satoshi Ohno,「曇りのち、快晴」, 多田慎也）[3]

(2)では、同一楽曲中に同一の話者が同一の聞き手に対して、命令表現（「踏みならせ」「変えていけ」）と依頼表現（「満たして」）を併用している。通常《格上》は命令表現を用い、依頼表現は用いにくいと考えられる（瀬沼 2018）。そのため、命令表現と依頼表現を併用する(2)の話者の「格」は、依頼表現を用いることができるという点で《格上》というほど上ではなく、命令表現が用いられている限り《格下》でもない。このような発話が可能なのは、話者が聞き手と自らを《同等》な関係として捉えている場合である。

さらに「性」に関して、同一の話者が同一の聞き手に対して〈男ことば〉と〈女ことば〉の両方を併用しているものも見られる。

(3) a. そんな革命前夜の僕らを誰が止めるというんだろう もう迷わない 君のハートに旗を立てるよ 君は僕から諦め方を奪い取ったの

b. 君が全然全部なくなってチリヂリになったって もう迷わない また 1 から探しはじめるさ 何光年でもこの歌を口ずさみながら

（RADWIMPS,「前前前世（movie ver.)」, 野田洋次郎）

(3)の話者が用いる終助詞「の」と「さ」はそれぞれ〈女ことば〉と〈男ことば〉である（金水編 2014）[4]。つまり、男性性と女性性の両方が表れているため、「性」の尺度に関して、《男》のような部分と《女》のような部分をともに持つことになる。このような例から以下では、「性」の分類として《男》《女》のほかに、その両方を併せ持つキャラクタとしての《両性》を設ける。

以上をまとめると、4 つの尺度とその内容は表 1 のように整理される。発話キャラクタを一定の尺度で分析することによって、明らかになったキャラクタ同士を客観的に比較することができるようになり、より体系的に発話キャラクタを捉えることが可能になると考える。

表 1　4 つの尺度の分類

品	《上品》/《下品》/ 無指定
格	《別格》/《格上》/《同等》/《格下》/《ごまめ》/ 無指定
性	《男》/《両性》/《女》/ 無指定
年	《老人》/《年輩》/《若者》/《幼児》/ 無指定

３．先行研究

自称詞「ボク」「オレ」に関しては、歴史言語学、対照言語学、役割語、社会言語学など様々な観点で分析がされている。

三輪（2005）は、通時的な観点や対照言語学的な観点から日本語自称詞の多様さについて論を展開している。「オレ」は古代には相手を低く見て言う対称詞であったが、転じて相手が同等や目下のときに使う自称詞となった。この事実を踏まえ、「オレ」は「ワレなどとともに、原初

の人称詞に直結するものを感じさせます。おそらくそのことから来る素朴、粗野感に加えて、オレは今日では親近感、自尊感、尊大感を強めています」（三輪 2005：51）と述べている。

三輪が指摘する「オレ」の親近感、自尊感、尊大感は、フィクション作品等での「オレ」においても通じるところがあるように思われる。

定延（2011）は、椎名誠の小説『哀愁の街に霧が降るのだ』において主人公の自称詞が「ぼく」と「おれ」の間で変化する場面を取り上げている。「ぼく」から「おれ」に変化するのは主人公が相手に腹を立てて暴力的な行動に出ようとする場面であり、「おれ」から「ぼく」に変化するのは恋愛に関する場面で、主人公のハードボイルドにキメることができないという人物像に沿ったものであるという。つまり、発動されるキャラクタはコミュニケーション行動によって決まることがあり、暴力的な行動に出る場合は「オレ」が、ハードボイルドにキメるという行動がとれない場合は「ボク」が使われるという指摘である。

金水（2003）は役割語に関する重要な指摘を多くしている。「ボク」と「オレ」が描く人物像の違いは戦前の小説等にすでに現れていて、その使用が相対的なものであるという。その時期の「ボク」は少年漫画において〈書生ことば〉と共に用いられたことから、「上昇志向に溢れた、理想主義的な、あるいは立身出世を夢見る」（金水 2003：124）ヒーローに使われており、決して柔弱なわけではなかった。ところが戦後しばらくして、少年漫画のヒーロー像が「むき出しの闘志や野性味を持ったキャラクター」（金水 2003：124）へと変化すると、同時に自称詞に「オレ」が使われるようになり、それにより「ボク」のイメージが大きく変わり、「家庭や学校に擁護され、飼い慣らされた少年」という人物と結び付けられるようになったと指摘している。

秋月（2014）は役割語の観点から、マンガにおける脇役男子がどのような言葉づかいをしているのかを分析している。その結果、脇役男子は「知性派男子」と「野生派男子」に分けることができるという。知性派男子とは、『ドラえもん』のスネ夫や『クレヨンしんちゃん』の風間くんのような男子で、自称詞に「ぼく」、対称詞に「きみ」を用い、文末表現に「さ」「たまえ」を使うなどの特徴があるという。一方、野生派男子とは、『ドラえもん』のジャイアンや『ちびまる子ちゃん』のはまじのような男子で、自称詞に「おれ」、対称詞に「おまえ」、文末表現に「ぜ」「ぞ」「な」を使うなどの特徴があるという。つまり、「ボク」は知性派男子のような人物に用いられ、「オレ」は野生派男子のような人物に用いられる傾向があるという指摘である。

太田（2009）は役割語の観点からスポーツ放送における翻訳に注目し、同じオリンピックのスーパースターであるウサイン・ボルトとマイケル・フェルプスに当てられた自称詞に違いがあることを指摘している。太田は、ボルトには「オレ」が当てられた一方でフェルプスには「ボク」が当てられているという事実について、それぞれの人物像が関係しているという。ボルトは記録以上に自信にあふれたパフォーマンスが印象的である一方で、フェルプスは記録そのものが注目され、パフォーマンスではなく記録までの過程（肉体、トレーニングなど）とともに報じられることが多い選手であった。つまり、金水（2003）のいうところの少年漫画における

「理想を追い求める賢いヒーロー像」＝「ボク」＝フェルプス、「強く野性的なヒーロー像」＝「オレ」＝ボルトという構図があったのだと述べている。

定延（2011）、金水（2003）、秋月（2014）、太田（2009）はいずれも役割語やそれに関連する観点から「ボク」「オレ」を分析した。次に挙げる Miyazaki(2004)、大和田（2010）は自称詞の使用実態という観点から「ボク」「オレ」が持つイメージに関して指摘している。

Miyazaki (2004) は、日本の中学生の自称詞使用を、学級という社会と関連付けて考察している。Miyazaki は中学生が自称詞使用に対してどのようなイメージを持っているのかを調査し、「ボク」を男子が用いると「オレ」よりも男らしさに欠け、「弱い男子」「ママっ子」として否定的に捉えられていることを明らかにした。また、「オレ」は非常にかっこいい、今どきであるというイメージがある一方で、偉そうで、心の弱さを隠そうとする語であるとも考えられているという。これらの調査結果を受けて Miyazaki は次のように述べている。

> 明らかに男性の代名詞であるボクがこのように中傷され、そして男らしさ、強さ、あるいは学校社会における力によってオレとは区別されているというのは、面白いことである。
>
> （Miyazaki2004：265、拙訳[5]）

つまり中学生にとって「ボク」は「オレ」よりも男らしさに欠け、弱々しいということである。

大和田（2010）は大学生を対象に自称詞の使用実態とイメージを調査し、若者が自称詞にこめる機能的意味を考察している。調査の結果、「オレ」を使用する学生は「オレ」がカッコいい、男らしい、若い、積極的といった肯定的なイメージを持っている一方で、「ボク」に対して子どもっぽく弱々しいとして忌避する者も多くいたということが明らかにされた。また、「ボク」を使用する学生は、「ボク」が優しい、落ち着いているといったイメージを持っており、加えて「オレ」が大人っぽい、正直というイメージを持っていることが明らかにされた。

以上、様々な観点から「ボク」「オレ」が分析されてきたことを概観した。これらを踏まえると「ボク」は優しい、弱々しい、知的、子どもっぽいというイメージが、「オレ」は尊大、強い、野性的というイメージが持たれる傾向にある。このように、従来の研究では自称詞が異なれば表れるキャラクタも異なるという指摘が多く見られる。しかし実際は、自称詞が異なっていても同じようなキャラクタが表れることもある。また、従来の研究は様々な観点から自称詞がもつイメージについて言及しているが故に、これまで明らかになってきた各自称詞が表すイメージやキャラクタの違い、類似性を体系的に分析することが困難である。そこで、定延（2011）による発話キャラクタを分析するための 4 つの尺度を用いて「ボク」「オレ」を用いるキャラクタを観察し、それぞれのキャラクタを体系的に比較することを目指す。

4．分析方法

本調査ではポピュラー音楽の歌詞を調査対象テクストとして扱い、そのうち自称詞「ボク」

「オレ」が出現するものに表れる発話キャラクタを、4 つの尺度（「品」「格」「性」「年」）を用いて分析する。第 5 章の分析で見るように、ポピュラー音楽の歌詞に表れる発話キャラクタのほとんどは《私たち》タイプである。よって、4 つの尺度を用いた分析が可能である。

なお、ここで目的とすることは「ボク」「オレ」を用いる発話キャラクタを量的に調査することではない。表れる発話キャラクタを 1 つの傾向として認めるためには量的調査による裏付けが必要になると思われるが、ここでは一先ず、「ボク」「オレ」を用いる発話キャラクタにどのようなものが認められるか、それはたまたま出現するのではなく複数の異なるテクストで認められるのかという観点で調査をする。そして、量的調査による裏付けは今後の課題とする。

歌詞は、その多くが話しことばとして書かれている点で他の発話と共通する。一方で他の多くの発話と異なる性質も持つ。例えば 1 つの歌詞で話者が一貫しており（話者交替がなく）、1 曲を通して 1 つのキャラクタが描かれる。すなわち、他の発話と同じくキャラクタを表す多様な言語要素（文末表現、感動詞など）が観察できるうえ、1 曲の中で異なるキャラクタが複雑に絡み合うことが比較的少ないと思われ、容易に発話キャラクタを観察できると考える。

また、歌詞は話者（「ボク」など）から特定の聞き手（「アナタ」など）への微視的な発話と、作詞者から不特定な音楽の聴き手への巨視的な発話という二重の構造（山口 2007）で成り立っており、この点で現実場面における発話と異なる。歌詞を観察してみると、同じ作詞者でも楽曲によって発話の様子が違い、また実際とは異なる性別として作詞している。つまり、歌詞が作詞者による実際の発話を書き起こしたものであるとは考えられない。むしろ、発話者から不特定の聴き手へ向けた巨視的な発話の内容を、歌詞の中の発話者から特定の聞き手への微視的な発話の中で語らせたものである。中には先に挙げた(2a)の「踏みならせ！」のように作詞者から不特定の聴き手へ向けた発話であるともとれる歌詞があるが、これもまた作詞者から不特定の聴き手への巨視的な発話の内容を、歌詞の中の発話者に特定の聞き手へ向けた微視的な発話において語らせたものであると捉えても問題ない。よって、歌詞において直接的に表れている発話は微視的な発話であると考える（巨視的な発話はその背後に込められたものである）。この点から、歌詞はある特定の話者が話者交替をほとんどすることなく、ある特定の聞き手に行う発話であると捉えることができる。以上を踏まえ、歌詞を調査対象とする。

今回の分析では歌詞の中でもポピュラーなものを観察する。それは、多くの人々に受容されているポピュラー音楽に現代人の多くが共感できる発話キャラクタが表れていると思うためである。

具体的にポピュラーであるとする楽曲は、オリコン株式会社の「年間 CD シングルランキング」（2007 年度から 2018 年度版）、株式会社エクシングの「JOYSOUND 年間ランキング」（2012 年から 2018 年版）、株式会社レコチョクの「レコチョクランキング」（2007 年から 2018 年版）の 3 つで 10 位までの楽曲である。楽曲の異なり数は 232 曲で、そのうち自称詞「ボク」が出現したものが 91 曲、「オレ」が出現したものが 9 曲であった。3 つのランキングが楽曲のポピュ

ラー性を表すと考える根拠は以下の通りである。「年間 CD シングルランキング」、「レコチョクランキング」はどのくらい買われたかを、「JOYSOUND 年間ランキング」はどのくらい歌われたかを示すという点で、その楽曲がどの程度娯楽的なものかという目安になる。また、3 つのランキングともにどのくらい聴かれたかを示すという点で、その楽曲がどのくらい大衆的なものかという目安になる。

5．ポピュラー音楽の歌詞における《ボク》キャラ

本章では、ポピュラー音楽の歌詞における、自称詞「ボク」を用いる発話キャラクタ（以下、《ボク》キャラ）がどのようなものかを分析する。

自称詞「ボク」が表れる歌詞を観察すると、次のように丁寧語を用いたものが見られる。

(4) 笑っていても 泣いて過ごしても平等に時は流れる 未来が僕らを呼んでる その声は今 君にも聞こえていますか？ （Mr. Children,「HANABI」, 桜井和寿）

(5) 生まれてくる前 聞いたようなその深い声 それだけで人生のオカズになれるくらいです （B’z, 「イチブトゼンブ」, 稲葉浩志）

(6) 好きとか嫌いとか欲しいとか 気持いいだけの台詞でしょう ああ白黒付けるには相応しい ・・滅びの呪文だけれど・・ （Doughnuts Hole, 「おとなの掟」, 椎名林檎）

丁寧語は《上品》な言葉づかいの 1 つである[6]。したがって、《ボク》キャラの 1 つとして「品」が《上品》なキャラクタが認められそうである。

一方でポピュラー音楽の歌詞において、丁寧語を用いた《上品》な《ボク》キャラとは違い、むしろ《下品》に近い言葉づかいをする《ボク》キャラも見られる。これは、従来ほとんど指摘されてこなかったようなイメージが自称詞「ボク」と結びついていることを示唆する。

5．1.《下品な男》の《ボク》キャラ

自称詞「ボク」が表れる歌詞では、略語や短縮形、「る言葉」の使用など、「品」が《上品》なキャラクタはしないような、むしろ《下品》なキャラクタがするような発話が見られる。

(7) a. フライングゲット だから 誰より早く 君のハートのすべて 僕のもの 好きだから ラブ・フラゲ！

b. 告白ウェルカムさ おいで！ 素直にならなきゃ楽しくないぜ！

（AKB48, 「フライングゲット」, 秋元康）

(8) a. 色とりどりのマスクかぶって 偽りのキャラを演じきって 僕はひと口 果実かじって 悪くないってかいいんじゃない？！

b. ここは笑顔でブレずかわして あっけらかんでいいんじゃない？

c. 輝きを秘めたハートビート 刻んでゆくのさ 誰にもゆずれない 胸の奥には 光があ

るよ （嵐，「Troublemaker」, H. Suzuki）

(7)の楽曲では、a で「フライングゲット」の略語「フラゲ」が見られる。また、b に見られる終助詞「ぜ」は〈ヤンキー語〉である（秋月 2013）。(8)の楽曲では、a で「っていうか」の短縮形「ってか」、b で「る言葉」の「ブレる」が見られる。

以上に見られた略語、短縮形、〈ヤンキー語〉、「る言葉」の使用[7]は《上品》なキャラクタがすることのない発話である。

定延（2011）によると、発話キャラクタの「品」に関して、《下品》なキャラクタは《上品》なキャラクタの発言を直接引用できる（(9a)）が、《上品》なキャラクタが《下品》なキャラクタの発言を、《上品》なまま直接引用[8]することはできない（《上品》がぶちこわしになる）（(9b)）。

(9) a. げっへへ、そういうわけでよぅ、お嬢様はよぅ、『あなたにお願いしますわ』っておっしゃったわけよ

b. その方、『げっへへ、もちろん、引き受けやすぜ』っておっしゃいましたわ

（定延 2011：134）

ここで、(7)(8)に見られた略語、短縮形、〈ヤンキー語〉、「る言葉」の使用が《上品》なキャラクタによって直接引用できるかどうかを見てみよう。

(10) a. その方、『彼はあたおかだ』っておっしゃいましたわ。

b. その方、『今日の天気は良くない、ってかむしろ悪い』っておっしゃいましたわ。

c. その方、『悩んでいても楽しくないぜ』っておっしゃいましたわ。

d. その方、『早くタピりたい』っておっしゃいましたわ。

(10)について、a は直接引用の中に略語「あたおか」が用いられているが、《上品》なキャラクタによる直接引用として不自然であり、《上品》さに欠ける。省略をせずに、「その方、『彼は頭がおかしい』っておっしゃいましたわ」という形であれば、《上品》なキャラクタによる直接引用文として自然になる。b は「というか」の短縮形「ってか」が直接引用されているが、「というか」を用いた場合と比べて不自然である。c の〈ヤンキー語〉「ぜ」、d の「タピりたい」も同様に、『悩んでいても楽しくないよ』、『早くタピオカを飲みたい』と比べて《上品》さに欠ける。

以上のように、略語、短縮形、〈ヤンキー語〉、「る言葉」の使用は《上品》なキャラクタに直接引用されれば不自然になる、《下品》に大きく寄った発話であると思われる。

さらに、(7)(8)の楽曲で発話主が用いる終助詞「ぜ」（(7a)）、「さ」（(8c)）は〈男ことば〉である（小川 2006、金水編 2014）ため、(7)(8)の発話キャラクタの「性」は《男》である。

よって、ポピュラー音楽の歌詞における《ボク》キャラの 1 つとして《下品な男》キャラクタが認められる。前述したように、自称詞「ボク」が表す人物像は従来、知的、弱々しい、優しいといったイメージが持たれてきた。本章で見た《下品な男》キャラクタとしての「ボク」は、このような従来の指摘とは異なるものである。

5. 2.《ボク》キャラと《オレ》キャラ

《下品な男》の《ボク》キャラは、遊助による楽曲「ひまわり」((11)) の発話主にも見られる。ただし、この発話主は自称詞に「ボク」だけでなく「オレ」も用いている（「オレ」がメインである）という点で(7)(8)の発話主とは異なる。

(11) a. こぼした涙 俺バカだから お互いの夢 それ宝だから！
b. 青い空と雲 太陽つかまえんぞ 君がいるから俺は笑う
c. さぁ 手を繋いだら また一緒に歩こうか 俺らは 笑顔の ひまわりさ！
d. いつも黄色い 愛のカタチ 僕のひまわり… （遊助,「ひまわり」, 遊助）

(11)について、a でぞんざいな語「バカ」が見られる点で「品」が《下品》であり、b、c で〈男ことば〉の終助詞「ぞ」「さ」が見られる点で「性」が《男》である。

このように、自称詞「ボク」と「オレ」を併用し、むしろ「オレ」をメインに用いる話者のキャラクタが《下品な男》として表れていることから、前節で見た《下品な男》の《ボク》キャラは、自称詞「オレ」を用いる発話キャラクタ（以下、《オレ》キャラ）と関連があると思われる。そこで、ポピュラー音楽の歌詞における《オレ》キャラを見てみよう。

調査対象とした楽曲 232 曲中、発話主が「オレ」を用いるものは「ひまわり」を含めて 9 曲であり、そのうち 5 曲（「ひまわり」を含む）に共通して「品」が《下品》、「性」が《男》であった。以下に該当する歌詞を引用する。

(12) a. 俺が恋して 破れた夜は ガキの頃のように ブランコに立ち
b. どんなつらくたって 悲しみが続くわけじゃねえ 強く生きようぜ
c. おまえがいなくても 俺がいなくても 一人で生きられる 別々の道 進んだって 空は繋がってるんだ （AKB48,「前しか向かねえ」, 秋元康）

(13) 隠し通せやしない 嘘で固めた言葉 メッキ剥げても当たり前なのさ ありったけの自分を さらけ出してみるぜ 知識ないと言われてもいい
（羞恥心,「羞恥心」, 島田紳助）

(14) a. 失うもの無いぜ 戻れないぜ 全てを賭けて Let the show begin
b. 日の丸背負い Lock on 生きろ Rock 道 ガキの頃描いてたダサい大人に 「Anybody home?」 （KAT-TUN,「DON’T U EVER STOP」, SPIN／JOKER）

(15) a. 全ての季節 お前とずっと居たいよ 春夏秋冬
b. 苦労ばっかかけたな てかいっぱい泣かせたな ごめんな
c. 飽きたらまた探すのさ 行く宛 さぁ 今日はどこ行こうか？
（ヒルクライム,「春夏秋冬」, TOC）

(12)から(15)の「品」について、ぞんざいな語「ガキ」が見られる点（(12a)(14b)）、ぞんざいな対称詞「オマエ」が見られる点（(12c)(15a)）、〈ヤンキー語〉の終助詞「ぜ」が見られる点（(12b)(13)(14a)）、ぞんざいな否定の語「ねえ」が見られる点（(12b)）、「ていうか」の短縮形「てか」が見られる点（(15b)）で《下品》である。

「性」については、〈男ことば〉の終助詞「ぜ」（(12b)(13)(14a)）、「さ」（(13)(15c)）、「な」（(15b)）が見られることから《男》である（小川 2006、金水編 2014）。

このように、《オレ》キャラの 1 つとしても、《下品な男》キャラクタが認められる。したがって、自称詞「ボク」と「オレ」で同じようなキャラクタが表されることがあると考えられる。

ただし、《下品な男》キャラクタがどのくらい典型的なキャラクタなのかという点で、《ボク》

キャラにおけるそれと《オレ》キャラにおけるそれとでは異なると思われる。今回は調査対象楽曲の中で《オレ》キャラが表れるもの自体が限られており、その傾向を見るのに十分なデータ量の分析であるとは到底言えないが、ポピュラー音楽の歌詞において《下品な男》キャラクタが《オレ》キャラのほとんどで見られたのに対し、《ボク》キャラでは 91 曲中 3 曲で認められたものであった。つまり、《下品な男》としての《ボク》キャラは、典型的なキャラクタというよりも周辺的なキャラクタに近い可能性がある。

《下品な男》としての《ボク》キャラと《オレ》キャラは同じものと考えてよいのだろうか。この点に関して、言葉づかいと発動のされ方に注目して次章で考察する。

６．考察：《ボク》キャラは《オレ》キャラと同じか

第５章で見てきたように《ボク》キャラと《オレ》キャラは《下品な男》を表すことがあるという点で共通する。では、《下品な男》の《ボク》キャラと《オレ》キャラは同じキャラクタを表すと考えて良いのだろうか。筆者はそうではないと考える。本章ではこの点について、《ボク》キャラと《オレ》キャラの言葉づかいと発動のされ方という 2 点から、《下品な男》の《ボク》キャラと《オレ》キャラの違いに迫る。

6．1.《ボク》キャラと《オレ》キャラの言葉づかい

言葉づかいに関して、《下品な男》の《ボク》キャラよりも《下品な男》の《オレ》キャラのほうが、一層ぞんざいな表現を用いる傾向にある。

(7)(8)に挙げたように、《下品な男》の《ボク》キャラは、略語、短縮形、〈ヤンキー語〉、「る言葉」の使用という言葉づかいをし、それによって《下品》さが表れていた。一方で、(12)から(15)に挙げたように、《下品な男》の《オレ》キャラは、ぞんざいな語「ガキ」「オマエ」「ネエ」、そして〈ヤンキー語〉、短縮形の使用という言葉づかいをし、それによって《下品》さが表れていた。つまり、4 つの尺度の分析に関して同じように《下品な男》のキャラクタが認められた《ボク》キャラと《オレ》キャラを比べると、略語、「る言葉」の使用が前者の、ぞんざいな語「ガキ」「オマエ」「ネエ」の使用が後者の特徴的な言葉づかいである（〈ヤンキー語〉、短縮形の使用は両者に共通の特徴である）。

略語、「る言葉」の使用は、(10)に見たように《上品》なキャラクタが直接引用すれば不自然であることから、《下品》に近い表現である。ただし現実場面での発話を考えると、略語、「る言葉」の使用は一般的に見られるものである。「品」に関して、定延（2011）は次のように述べている。

> 「品」とは何よりも巷の人間に想定される概念である。当該社会が課す文化的制約から逸脱せず、その中におとなしく、慎み深く、控えめにおさまるが、その行動はあくまで自由で美しく見え、制約を感じさせない、というのが上品で、そうでないのが下品である。
>
> （定延 2011：140）

略語、「る言葉」の使用が現実場面で一般的に見られるということは、「当該社会が課す文化的制約から逸脱」しているとは言い切れない表現であるということであろう。

一方で、ぞんざいな語「ガキ」「オマエ」「ネエ」は、《上品》なキャラクタが直接引用すれば不自然になるだけでなく、現実においても、特殊な場面（喧嘩、威嚇など）を除いて用いるこ

とは一般的でない。つまり、「当該社会が課す文化的制約から逸脱」した表現である。

よって、同じような《下品な男》キャラクタであっても、《オレ》キャラが用いる表現は《ボク》キャラが用いる表現よりも、一層《下品》なものである。このことは《ボク》キャラと《オレ》キャラの違いを示すとともに、4 つの尺度のうち「品」について、《上品》と《下品》という分類は明確に区別できるものでなく、連続的な性質を有するものであることを示唆する。つまり、《下品な男》の《ボク》キャラの「品」はやや《下品》に寄ったものであり、《下品な男》の《オレ》キャラの「品」は大きく《下品》に寄ったものである。

6. 2.《ボク》キャラと《オレ》キャラの発動のされ方

第 5 章の最後に述べたように、《下品な男》の《ボク》キャラと《オレ》キャラは発動される頻度に差がある。《下品な男》の《ボク》キャラは自称詞「ボク」が出現する 91 曲中 3 曲で見られた一方で、同様の《オレ》キャラは自称詞「オレ」が出現する 9 曲中 5 曲で見られた。このことから《下品な男》キャラクタは《ボク》キャラの中では周辺的で、《オレ》キャラの中では典型的であると予想される。ただし、この仮説を立証することは、次の 2 点で困難である。

1 点目に、今回の調査対象楽曲の数がこの仮説を立証するのに十分でない。出現頻度について述べるためには、膨大なデータ量が必要になる。2 点目に、ポピュラー音楽の歌詞は一曲を通して話者交替がない点で発話キャラクタの観察が容易であるが、場面の転換や具体的な聞き手の像が分かりづらく、キャラクタの発動のされ方までを分析することが難しい。

以上を踏まえて本章では出現頻度を量的に分析することはせず、「ボク」や「オレ」を用いる発話主がテクスト中で一貫して《下品な男》として表れるのかどうかということについてマンガにおける発話を参考に考察し、仮説の立証は別の機会に行うこととする。

マンガは歌詞と比べて場面の転換や具体的な聞き手の像が明確に示されるため、どの場面や聞き手に対してどんなキャラクタが発動されたのかという、キャラクタの発動のされ方を分析するのにより適していると思われる。そのため、以下では《下品な男》の《ボク》キャラと《オレ》キャラが異なるという主張を強化する目的でマンガの発話を観察する。

マンガの発話においても、《下品な男》の《ボク》キャラが見られる。例えば、甲本一によるマンガ「マッシュル-MASHLE-」の主人公「マッシュ」がそうである。以下、 (16)はマッシュのセリフである。それぞれ 1 行目に、誰に向けた発話なのかを「→○○」の形で示す。

(16) a. →ウォールバーグ
校長がさっき言ってた「もし校長が僕の前に立ちはだかったら」って質問の答えなんですけど…その時はボコボコにしてあげますよグーパンで
（甲本一「マッシュル-MASHLE-」『週刊少年ジャンプ』2020 年 11 号, 集英社）

b. →シルバ、女子魔法学生
いい加減にしろよお前ら…上等だよ　今度は僕が 10 回勝負受けてやる　かかってこいゴミ野郎
（甲本一「マッシュル-MASHLE-」『週刊少年ジャンプ』2020 年 21・22 号, 集英社）

「マッシュル-MASHLE-」は、魔力を持たない少年「マッシュ」が魔法学校で優秀な成績を修めるべく奮闘するという内容である。マッシュはボクを自称詞に用いる。(16a)は魔法学校の入学試験において、校長の「ウォールバーグ」がマッシュと面接をする場面である。ウォールバーグが、もし自らがマッシュの前に立ちはだかり大切な人を奪おうとすればどうするかと脅し

たことへの回答の中で、マッシュは「グーパンチ」の略語「グーパン」を用いている。これらにより《下品》さが表れている。(16b)は、マッシュの友人が不良学生の「シルバ」たちの罠にはまり大けがを負わされた場面での、マッシュの発話である。ぞんざいな対称詞の「お前」、ぞんざいな語の「ゴミ野郎」が用いられており、《下品》さが表れている。

以上のように、マッシュは《下品な男》の《ボク》キャラとして表れることがある。しかし、このような《下品》さが表れることは稀であり、多くの場合は次のように発話する。

(17) a. →レグロ

家族だから　僕にとって一人しかいない　ごめんじいちゃんわがままいって

（甲本一「マッシュル-MASHLE-」『週刊少年ジャンプ』2020 年 9 号, 集英社）

b. →ファルマン

あなたが僕をいつでも退学させられるように僕もいつでもアナタを埋められる　牢屋に閉じ込められようと体が半分なくなろうとも這いずってでも埋める

（甲本一「マッシュル-MASHLE-」『週刊少年ジャンプ』2020 年 14 号, 集英社）

(18a)は魔力がないマッシュについて、祖父（血は繋がっていない）である「レグロ」が魔法警察に問い詰められる場面である。危険を感じたレグロがマッシュに逃げるように指示したが、マッシュがそれを無視して魔法警察と対峙しようとし、レグロに(17a)のように発話する。(17b)は自分本位な理由でマッシュたちを退学させようとする教頭の「ファルマン」に対する発話である。(17a)のような緊張感のある場面であってもマッシュは家族や友人に対して《下品》な発話はせず、(17b)のように敵対する者に対する発話でも《下品》さが表れないことが多い。むしろ、《下品》でないキャラクタとして表れる傾向にある。

このような、本来は《下品》さが表れることが少なく、ある場面で一時的に《下品な男》として表れるような《ボク》キャラがマンガにおいて複数見られる。

一方で《オレ》キャラもまた、マンガでの発話において《下品な男》として見られる。例えば、稲垣理一郎と Boichi によるマンガ「Dr. STONE」の主人公「石神千空」がそうである。

(18) a. →イバラ

俺ら仲良く最後の二人　科学 VS石化（メデューサ）の大将戦といこうじゃねえか……！！！

（稲垣理一郎・Boichi「Dr. STONE」『週刊少年ジャンプ』2020 年 4・5 号, 集英社）

b. →科学王国のメンバーたち

俺らには電波っつう武器があんだ　今生の別れじゃねえぞ　お涙もいらねえわ　どんだけアホほど離れようが俺らは科学の波で繋がってる

（稲垣理一郎・Boichi「Dr. STONE」『週刊少年ジャンプ』2020 年 13 号, 集英社）

「Dr. STONE」は、突如全世界の人間が石化してしまった世界で奇跡的に復活した「石神千空」が科学の力を使って全人類の復活を目指すという内容である。(18a)は石化光線を使って千空たちの「科学王国」を滅ぼそうとする「イバラ」へ向けた発話である。「ない」のぞんざいな形である「ねえ」が用いられている。(18b)はイバラを倒したあと戦いの舞台となった「宝島」の人々と別れるシーンで、科学王国のメンバーたちに対する千空の発話である。ここでも「ない」のぞんざいな形「ねえ」が見られる他、「っていう」の短縮形「っつう」、ぞんざいな語「アホ」が見られる。以上から、(18)に挙げた千空の発話は《下品な男》キャラクタを表している。

前述したように、(16)(17)に挙げた「マッシュ」のような《ボク》キャラの多くでは、《下品な男》キャラクタが表れるのは一時的であり、通常はそのようなキャラクタが表れない。一方

で千空は、(18)に見たような《下品な男》キャラクタを表す発話を多くし、また対称詞には基本的に「テメー」を用いる。同様に、マンガにおける《オレ》キャラの中には、《下品》な発話を一貫して行い、その人物の話し方として定着している例が多く見られる。このことから、《下品な男》の《オレ》キャラは、（他のキャラクタが一時的に表れることはあり得るが）基本的には《下品》な話し方を一貫して行う傾向にあると思われる[9]。

よって《下品な男》の《ボク》キャラと《オレ》キャラは、前者が一時的に表れるものであり、後者が一貫して表れるものであるという点で、異なるものであると思われる。

7．まとめ

ここまで、《下品な男》の《ボク》キャラと《オレ》キャラについて、ポピュラー音楽の歌詞とマンガのセリフにおける発話に注目して分析した。その中で次の 3 点を主張した。

① 《ボク》キャラと《オレ》キャラの両方において、《下品な男》キャラクタが見られる。

② 同じ《下品な男》キャラクタであっても、《ボク》キャラの発話よりも《オレ》キャラの発話の方がより《下品》な傾向にある。

③ 同じ《下品な男》キャラクタであっても、《ボク》キャラでは一時的に発動され、《オレ》キャラでは一貫して発動される傾向にある。

従来の指摘では、自称詞「ボク」は「オレ」と比べて弱々しい、優しい、大人な人物を表す傾向にあるとされてきた。しかし、第 5 章で見られた《下品な男》の《ボク》キャラはそのような指摘とは合致しないものであり、また対極に扱われることの多い《オレ》キャラとの共通性が見いだせるものである。ただし、従来の指摘には自称詞「ボク」が幼児や少年らしさを表すともあり、《下品》さが《幼稚》さと関連するならば、《下品な男》の《ボク》キャラと従来の指摘の関係も否定しきれるものではない。この点は今後細かく考察したい。

②③のように、《ボク》キャラが《オレ》キャラほどでなくとも《下品》な発話をすることがあり、またそれが一時的であることが示唆された。《オレ》キャラの《下品な男》は一貫して表れるため、《オレ》キャラの中で《下品な男》キャラは中心的なものであると思われる。この点から、《ボク》キャラが場面によって《オレ》キャラのようなキャラクタを意図的に表そうとした結果、《オレ》キャラほど濃くはない《下品な男》キャラクタが一時的に発動されたという動きが予想される。つまり、《下品な男》キャラクタに関して、《ボク》キャラが《オレ》キャラを真似ようとしたもの、《ボク》キャラが、《オレ》キャラの 1 つであり中心的なキャラクタである《下品な男》を一時的に借りて来たもの、という構図が予想される（図 2）。

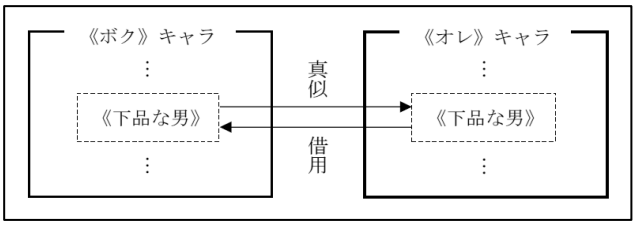

図 2　《下品な男》の《ボク》キャラと《オレ》キャラの接点

以上、《ボク》キャラの中に「ボク」を用いたまま《オレ》キャラに近いキャラクタを表すものがあるという、自称詞とキャラクタの結びつきに関する一端を示唆することができた。今後、他の自称詞や他のキャラクタの結びつきに関しても分析していく。

注

⑴ 「キャラクタ」とは、振舞い方や話し方のもととなる人物像であり、次のような性質をもつものと定義される。

本当は変えられるが、変わらない、変えられないことになっているもの。それが変わっていることが露見すると、見られた方だけでなく見た方も、それが何事であるのかわかるものの、気まずいもの　（定延 2011:199）

⑵ 「役割語」は金水（2003）で次のように定義される概念である。

ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。（金水 2003：205）

⑶ 以下、歌詞の引用元は、（アーティスト名，「楽曲名」，作詞者名）の形で示す。

⑷ 終助詞「の」はしばしば〈女ことば〉であると論じられる一方で、現代日本語において男性が用いても不自然ではない（(19a)）。ただし、「の」を用いない(19b)の発話と比べてどちらがより女性的な発話かと問えば、(19a)と答える日本語母語話者が多いだろう。筆者が述べる〈女ことば〉〈男ことば〉とは、実際に女性、男性が用いることばではなく、女性性、男性性を帯びることばを指す。

(19) a. そういうの嫌いなの。
　　b. そういうの嫌いだ。

⑸ 原文は以下の通りである。

It is interesting that *boku*, a plain masculine pronoun, is denigrated in this way and is differentiated from *ore* on the basis of masculinity, strength, or power in the social world of the school.　(Miyazaki2004:265)

⑹ インターネットにおける言説を見ると、丁寧語の使用を上品だと捉えていると思われるものが複数見られる。

(20) でも、3 月末に、やらなくちゃいけない仕事も全然できていない状態の時、“有給残っているからもったいないので、休暇取ります”ってお上品に言った時は、あ、この人は仕事しに来ているんじゃないんだなぁってわかった。
（http://redmenzies.blog26.fc2.com/blog-date-20090821.html, 2020 年 9 月 19 日アクセス）

(21) だって。ずっと語尾に『ございます』付けてお上品に話してはるけど、出てくる単語が『元暴走族』やら『テキーラ』やら『殴られた』やらさあ。一見お上品に聞こえるけど、よう聞いたらなんやねんこれ！って感じやん
（https://02706960.at.webry.info/201012/article_5.html, 2020 年 9 月 19 日アクセス）

⑺ 鄭（2007）によるアンケート調査の結果から、「る言葉」は教養がない、乱暴な感じといったイメージを持たれていることが明らかとなっている。ステレオタイプ的に考えると、教養のある人は場をわきまえることができ、上品に振る舞うことができると思われる。また、乱暴はぞんざいさと結びつくものであり、《下品》と関わると思われる。

⑻ 直接引用は、ある場におけることばを別の場で、そのまま引用することである。しかし、定延（2011）で述べられている「直接引用」には単にことばをそのまま再現する以上の働きが期待されていると思われる。定延は、(9)に取り上げたような、《上品》なキャラクタによる《下品》な発話の直接引用の不可能性について、次のように述べている。

「文をしゃべっていく際、話し手のキャラクタは一貫していなければならない」という先に取り上げた考えは、発話キャラクタが上品な場合にかぎっては、直接引用の引用内部にもよく当てはまるということである。　（定延 2011：134-135）

つまり「直接引用」によって再現されるのは、一言一句そのままのことばだけでなく、そのことばが表すキャラクタも、ということだと思われる。以下、定延（2011）の直接引用に関する考えを援用する際、直接引用をそのようなものとして扱う。

⑼ 《下品な男》キャラクタは、いくつか存在する《オレ》キャラの 1 つである。一方、マンガにおける発話では、丁寧語を用いている《オレ》キャラも一定数見られる。

(22) 唯我成幸→小美浪あすみ
す　すみません先輩　せっかくの旅行中に…　俺のことは気にせず遊んできてください…
（筒井大志「ぼくたちは勉強ができない」『週刊少年ジャンプ』2020 年 8 号，集英社）

(23) 烏山武光→朝野市子
このまま進めば俺の出番は滞りなく終わるでしょう　良くも悪くも舞台にさして影響を与えないまま…　そのとき俺はもう2度と役者を名乗れない気がするんです
（マツキタツヤ・宇佐崎しろ「アクタージュ act-age」『週刊少年ジャンプ』2020年1号, 集英社）

ただし、これらの《オレ》キャラは、そのほとんどが目上の相手への発話で発動されている。つまり、「品」とはほとんど無関係に、「格」が《格下》のキャラクタとして発動されたものであると思われる。相手が目上の場面など《格下》として発話するとき以外では発動されることが稀であり、その点で（一貫して表れる傾向にある）《下品な男》の《オレ》キャラと異なる。よって、丁寧語を用いる《オレ》キャラは《下品な男》の《オレ》キャラとは別のキャラクタとして認める必要がある。

参考文献

Miyazaki, Ayumi (2004) “Japanese Junior High School Girls’ and Boys’ First-Person Pronoun Use and Their Social World”, Ed. by Shigeko Okamoto and Janet S. Shibamoto Smith, *Japanese Language, Gender, and Ideology: Cultural Models and Real People*, pp.256-274, Oxford University Press.

秋月高太郎（2013）「続・ウルトラマンの言語学」『尚絅学院大学紀要』65, pp.29-42, 尚絅学院大学.

秋月高太郎（2014）「脇役男子の言語学ースネ夫やジャイアンはどのように話すのかー」『尚絅学院大学紀要』67, pp.41-54, 尚絅学院大学.

小川早百合（2006）「話しことばの終助詞の男女差の実際と意識」日本語ジェンダー学会編『日本語とジェンダー』, pp.39-51, ひつじ書房.

太田眞希恵（2009）「ウサイン・ボルトの“I”は、なぜ「オレ」と訳されるのか～スポーツ放送の「役割語」～」『放送研究と調査』59・3, pp.56-73, NHK 放送文化研究所.

大和田智文（2010）「若者における一人称の使用の様相とその機能的意味」『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』13, pp.77-86, 関西福祉大学社会福祉学部研究会.

金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語：役割語の謎』, 岩波書店.

金水敏編（2014）『〈役割語〉小辞典』, 研究社.

定延利之（2011）『日本語社会のぞきキャラくり：顔つき・カラダつき・ことばつき』, 三省堂.

瀬沼文彰（2018）「若者たちのキャラ化のその後」定延利之編『「キャラ」概念の広がりと深まりに向けて』, pp.154-178, 三省堂.

鄭香蘭（2007）「若者語におけるル言葉について～アンケート調査の分析～」『山口国文』30, pp.118-105, 山口大学人文学部国語国文学会.

西澤萌希（2019）「ポピュラー音楽の歌詞に生きるキャラクターことばとキャラクタの結びつきからー」『信大国語教育』29, pp.30-43, 信州大学国語教育学会.

三輪正（2005）『一人称二人称と対話』, 人文書院.

山口治彦（2007）「役割語の個別性と普遍性ー日英の対照を通してー」金水敏編『役割語研究の地平』, pp.9-25, くろしお出版.